企業業績や株価の名目上の数字だけではなく、実体の数字に留意することが重要です。

この一年間の日本経済は、新聞報道などによれば、円安基調で進んだことで企業の売上が上がり、株式市場も一見好調なようにみえます。しかし円安での恩恵を受けているのは、全体でみれば5%の大企業に限られており、95%にのぼる中小企業の姿を反映したものではないことにも留意すべきです。

また、好調な株価についても、その要因は円安での割安感により海外の投資家から資金が流入しているからです。特に、中国での株式市場や不動産が厳しい状況になったことで、大量の資金が日本に流れてきて株価を押し上げています。

こうしたことから、名目上の数字ばかりが上がり、企業の業績が上がっているように感じる心地よい状態が続いているというのが、この一年間の概況ではないでしょうか。

しかし数量ベースの数字は上がっていないので、中小企業では賃金も簡単に上げることはできません。また金利も、今の状況のままで金利を上げると、中小企業だけでなく社会全体への大きな影響が予想されることから、簡単には上げるわけにはいかないでしょう。企業業績や株価の名目上の数字だけではなく、実体の数字に留意することも重要です。

「過去の中に未来へのヒントがある」この言葉は企業活動の上でも参考になります。

こんな状況の今だからこそ、産業界も日本社会も、これまでのしがらみや既成概念などを一度捨て去り、未来へ進むギアチェンジが必要だと思っています。そして未来へ進むヒントは、意外にも過去の中に隠れているかもしれません。

たとえば将棋棋士の藤井聡太さんはAIを徹底的に研究

して新境地を切り拓いていますが、そのAIのデータは過去事例の蓄積です。過去事例を自分なりに分析し応用することで、藤井さんは将棋の未来を切り拓いています。

この「過去事例の中に未来へ進むヒントがある」という事実は、企業活動を進める上でも参考にするべきだと考えています。

かつての日本は、既存の優れたものの品質を高めることで差別化をして、競争に勝ってきました。これはプランAのやり方ですが、現在では中国や台湾、韓国などの競合する国々も同じようなことができる時代になってきて、それでは差別化はできません。

これからの時代は、プランBとして、日本の過去にあった歴史や経験から得た技や知恵をヒントに差別化することも一つの方向性になると思います。

「小さなユニットでうまくまわす」ことで、ネイチャーポジティブへ貢献していきます。

近年の国際的な課題として、地球温暖化への対応と共に生物多様性の課題も重要視され、自然を回復軌道に乗せるというネイチャーポジティブへの貢献が、企業活動でも強く求められています。

戦前までの日本は、紙や燃料などの少ない資源をうまく循環させながら生活することが当たり前の循環型社会でした。副産物を有効に使って育てる有機農法などは、まさに日本が得意とする技や知恵の宝庫です。さらに村のような小さなユニットで、皆が一緒に新しい価値を創り上げていくことも日本人は得意です。

ネイチャーポジティブへの最適解のヒントが、ここにあると思います。

小さなユニットで生産から消費・再生産するまでを計画的・効率的にまわしていくこと、皆が一緒になり協力して生産性を高めていくことこそ、日本がこれから目指すプランBの道になると期待しています。

ヤスハラケミカルではこうした動きに自ら取り組むべきと考え、新組織「イノベーション推進室」を立ち上げて、これまでの既成概念にとらわれない発想でネイチャーポジティブへチャレンジすることを始めました。

イノベーションへの取り組みを通じて、地域や日本を輝かせる光になりたいと願っています。

ヤスハラケミカルでは、過去10年にわたり筋肉質な生産体制の構築と生産性向上を目指して「生産設備の拡充」と共に「人財育成」に注力してきました。それらの体制を整えた今こそ、未来への「種まき」が必要で、イノベーション推進室はその基点となる組織です。

イノベーション推進室に期待することは、既存の原料調達から市場活動までのサプライチェーンにとらわれず、別の視点やより大きな視野からのアプローチで、資源を循環させながら新たな価値創造をうみだす「種」を見つけ育てることです。

発足からまだ1年程度ですから、その成果が現れ始めるのは、5年先10年先かも知れません。しかし未来には、それらの「種」が育ち「幹」や「花」となり、ヤスハラケミカルを前に進める新たな原動力になるはずです。

私たちのチャレンジは、日本の中では、まだ小さな取り組みに過ぎませんが、その活動によりネイチャーポジティブに貢献したいと考えています。そして、こうした活動が地域や日本をもう一度輝かせる活力の一助になるよう願って、継続的にチャレンジを続けていきます。